



イケケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 565 回 女性が輝く日本～スウェーデンは今！

2014.2.23

アベノミクス「成長戦略」の中で、「女性が輝く日本」の具体的政策目標として示された。内容は、2020 年の 25 歳～44 歳の女性就業率を 73%にする(2012 年 68%)、育児休業期間を子供が 3 歳になるまで延長、指導的地位に占める女性の割合を 2020 年までに 30%程度にする、2017 年度までに約 40 万人分の保育の受け皿を整備し待機児童解消を目指す等々、結婚・出産後の女性の復職を推進する課題が中心となっている。男女共同参画社会は「多様な生き方が選択できる社会」と銘打ちながら、その実は女性の社会進出促進策でしかない。子育て期の母親が仕事を辞めて、家庭に入ることを一方的に問題視し、女性も一生外で働かざるを得ない状況を作り上げようとしているように見える。

本当にそれでいいのだろうか？ 何か、本質的議論が欠けている。

高福祉の好例と言えばスウェーデン。

スウェーデンでは、子供は社会が育てるということが確立されていて、女性の社会進出率は 80%を超えている。しかしそれができるのは、公的機関が家庭の機能を引き受けている現実がある。つまり、ヘルパーもベビーシッターも公務員、現状の数倍の財源が必要となる。若者は、親から早々に自立するように教育される。自立と言えば聞こえはいいが、要するに親が面倒を見たくないから、子供を放り出しているにすぎない。

その結果、愛情に飢え精神を病んだ若者が急増。強盗、強姦など犯罪率はアメリカを遙かに超えて、先進国中トップ。刑法犯の数年の平均は 10 万人当りで、強姦事件が日本の 20 倍以上、強盗は 100 倍以上である。更には不安定な家庭に育ち、将来に絶望した若者の自殺も増えてきている。

女性の仕事にしても8割がパート労働。賃金は、女性のほうが男性より 34%も低い。

自立したいがために、自分の子供、親を施設に預ける。税金から給料をもらって、他人の子供、老人の面倒を見る。そしてその収入の多くが、税金に消えていく。

また、女性は男性に自己主張し抗議するのが当たり前で、夫婦愛は女性の権利の二の次的存在。その結果、離婚率が 50%を超え、片親の家庭が急増、母性を求める子ばかりになった。この悪夢のような社会制度を維持してきたスウェーデンの国家財政は、当然危機に陥った。こうした恐ろしい現実の背後にあるのが、「家庭・家族の崩壊」である。

スウェーデンの 100 歳を超えた老人に大学生が尋ねた。

「お爺さんの一生で、何がもっとも重要な変化でした？」…彼は二度の世界大戦か原子力発電か、あるいは携帯電話、パソコンなどの情報革命か等の回答を予測したが、老人の答えは、…「**家族の崩壊だよ**」…この一言に 高福祉社会の問題が集約されている。

女性の社会進出の背景は、日本とスウェーデンでは全く違うかもしれない。でも、次代の国を担うのは子供達だ。スウェーデンの子供達は今、病んでいるかもしれない。